

天使大学の海外研修における学び

第6回(2006年度)天使大学海外研修を一事例として

Tenshi College Overseas Study - The 6th Overseas Study Program Conducted in 2006 -

吉田 翠¹⁾

Midori YOSHIDA

沢 禮子²⁾

Reiko SAWA

石川 紀子³⁾

Noriko ISHIKAWA

The purpose of this paper is to introduce the overseas study program planned and conducted by the International Exchange Committee of Tenshi College. This overseas study aims at realizing the educational objectives of the school by helping students to develop a holistic view of humans and broaden their international horizons to become dedicated professionals in nursing and nutrition. First, the paper outlines the program in terms of its purposes, study plans, and preparations for the trip. Next, the main contents of the study will be elaborated based on the 2006 overseas study tour. They consisted of learning English and studies related to nursing and nutrition as practiced in the United States. During the stay, each student living with an American family was totally immersed in English and learned about American culture and communication. After the study tour, the participants' responses to the program, collected by means of a questionnaire, showed an overall satisfaction, with the homestay being especially highly valued. Their reports assigned by the Committee revealed significant learning in the light of the educational objectives. Lastly, some suggestions will be made to improve the program in the future.

天使大学国際交流委員会が企画した海外研修は、本学の教育目標「人間を全人的に理解できる能力を養う」「国際的視野を養う」「各々の専門的能力を基盤として、将来、各々の専門職の発展に貢献できる応用力と創造性を養う」などを体験学習する良い機会である。本報告では、はじめに研修の基本的な概要を説明し、次に第6回(2006年度)海外研修を一事例として研修の内容を具体的に紹介する。主な内容は語学研修と学生の専攻分野に関連した米国における看護・栄養事情についての視察研修であった。研修期間中、アメリカ人の家庭でのホームステイを通して、英語の運用力を高めながら、アメリカの文化やコミュニケーションについて学んだ。帰国後、参加学生に対するアンケート調査によれば、研修評価には全体的に好意的反応がみられ、特にホームステイは高く評価された。課題の研修レポートには本学の教育目標を具現した精神的な成長を示す学びがみられた。最後に、海外研修の今後へ向けて研修のあり方について提言する。

Key words: overseas study program (海外研修プログラム)
educational objectives of Tenshi College (天使大学の教育目標)
English learning (語学研修)
studies related to nursing and nutrition (看護学・栄養学関連の研修)
homestay (ホームステイ)

1) 前天使大学 看護栄養学部 教養教育科

(2009年1月20日受稿、2009年3月30日 審査終了受理)

2) 天使大学 看護栄養学部 看護学科

3) 天使大学 看護栄養学部 栄養学科

．はじめに

2008年度第8回を迎える天使大学の海外研修について研修の概要を説明し、併せて2006年度第6回海外研修にもとづいて研修の内容を具体的に紹介する。

天使大学開学の2000年度、国際交流委員会において海外研修の企画が提案され、2001年度実施に向けて検討が重ねられた。しかし2001年度の研修は9月11日に起きた米国同時多発テロのために中止となった。翌年2002年度は米国を避け、8月にオーストラリアのメルボルンにおいて初の海外研修が実現した。国際情勢に留意しながら、同年度3月に当初の研修予定地である米国西海岸ワシントン州シアトル近郊において研修を実施して以来今日に至っている。

本学の海外研修の特徴は、大学の教育目標¹⁾を基本にして、語学研修、学生の専攻分野である看護学と栄養学に関連した研修、およびホームステイを通して異文化交流への理解を深めることが盛り込まれていることである。これら基本方針は変わらないが、研修先の事情や参加学生数の増減により毎年微調整が必要であることから、本稿では研修の内容について2006年度を一事例として紹介する。

．海外研修の概要

1．研修の目的

2000年度当時の国際交流委員会が検討し、本学の教育目標を反映した以下のような研修の目的を設定した。

異文化体験を通じて、国際化に対応できる積極性を養う。

現地の環境、生活スタイルに応じた医療・看護・栄養事情を視察し情報を豊かにすることにより、国際的な視野を養う。

ホームステイにより英語によるコミュニケーションを実践し運用力を養う。

ホームステイにより協調性、自律性を養う。

これらのねらいが、海外研修という言語的および非言語的状況が相互に作用する“total immersion”（学習中の言語を使って生活しながらその言語を習得すること）の環境のなかでどの

ように具現されるか、つまりどのような学びをもたらすかを検証する。目的に「語学研修」を直接挙げない理由として、本学の教育目標に全人的人間観を養うことがうたわれているように、学生の海外に対する関心は必ずしも語学力向上のみとは限らず、外国の生活習慣、人々との交流、彼の地における看護・栄養事情の視察を通して見聞を広げるといふ、より全人的な学びを期待しているものと想定したことによる。しかし、将来看護・栄養の専門職者としてこれらの経験をよりよく発展させるためには言葉が必要であり、研修中に様々な機会を提供して語学研修が実りあるものになるよう計画されている。

2．研修プログラムの作成

研修目的にそって具体案を作成し、本学の海外研修旅行を担当する教育旅行社を通して、現地受入教育団体と交渉してもらおう。委員会と業者間でやりとりを重ね、最終的に委員会が求めるプログラムが出来上がる。参加学年は研修内容から3年次後期が望ましいが、現カリキュラム編成の都合上難しく、1年次生は専門関連の研修には知識が十分ではないことから、2年次生を対象とする。研修期間が学事歴および諸般の事情により3月中旬から下旬になるので、2年間の英語科目を履修した2年次生は語学研修への準備もより可能である。プログラムの主な構成は以下の点である。

- ・英語研修
- ・米国医療事情の視察研修
- ・ホームステイ
- ・エクスカージョン・アクティビティー（地域散策、ショッピング、市内見学など教室外活動）

3．教育旅行社と現地受入教育団体

現地の受入教育団体はGPI²⁾(Global Partners Institute)といい、語学教育・異文化理解国際交流プログラムを提供する非営利国際教育団体であり、本学が利用している教育旅行社ISA（アイエスエイ）直営の運営組織である（以後GPI、ISAと表記）。ISAとGPIの関係は、教育研修旅行を企画するISAが顧客の希望をとりまとめてGPI本部に連絡し、それを受けて研修希望先のジャパニーズリエゾン担当の日本人が、地元のGPI（主としてボランティア）に依頼する。このGPIが研修プログラム作成上の諸機関への交渉、研修

センターの選定、ホストファミリーの募集、TESL³⁾有資格者である講師を手配する。

4. 研修旅行の準備

帰省中に両親（保護者）とよく話し合えるように、2年次夏期休業直前に研修プログラムを配布し、休み明けの9月中旬の指定日までに仮申込み⁴⁾をする。10月下旬ISAの説明会が開かれ、その後本申込みをする。12月初旬から本学の同行教員による学内説明会が開かれ、ISAの研修旅行ガイドブックに加えて、特にホームステイ先における生活上の諸注意や助言をする。説明会の開催には学生の時間的制約により毎回調整が必要である。ISAの説明会は3回、同行教員の学内説明会と参加学生のグループごとの話し合いに、併せて6回ほど時間を設ける。研修終了時に学生側が“Farewell Party”（さよならパーティー）を催すので、その準備についてもヒントや助言を与え、学生が自主的に取り組めるよう支援する。

海外研修の内容 2006年度の事例から

研修プログラム⁵⁾について、1. 語学研修、2. 学生の専攻分野に関連した研修、3. 研修の評価の順に述べ、最後にさよならパーティについて言及する。

1. 語学研修

研修場所：スタディーセンター

(Bethany Bible Church)

講師：TESL 有資格の語学講師 2名

午前：英語の授業 (9:00 a.m. 12:00 a.m.)

2クラス編成

午後：英語を介してのさまざまな活動

(13:00 p.m. 16:00 p.m.)

Action English (英語のゲーム)、外部講師による小講義、体験談、パネルディスカッション、教会周辺の散策、大学訪問(2学科に分かれて講義や施設見学)、大学以外の施設見学、シアトル市内見学とショッピングモールでの買物など多彩なプログラムを日替わりで提供する。

1) 英語クラス内の研修と教材

語学研修初日に講師の一人が学生に言った次の言葉通り、終始一貫して学生の発話を引き出すために創意工夫のある様々な活動が用意されていた。

“I know that you have the fine knowledge of English up here (頭を両手で挟んで) but I want you to speak out, to be able to express yourself in English. This is the purpose, goal of this class.”

授業は、前日の夜ホストファミリーにインタビューし回答をまとめて発表するという宿題から始まる。それから教材ファイル⁶⁾を用いてディスカッションが続く。時として講師が臨機応変に話題を提供することもある。

教材ファイルは既成の教科書ではなく、研修の目的に沿って様々な話題や活動を盛り込んだGPI自主作成のものである。英語の難易度は易から難へ、量は少ないものから多いものへ、話題も身の回りのことから文化、社会の動向へと配列されている。

2) 英語クラス外の研修

(地域散策、観光、ショッピング)

シアトルの街のシンボルタワー「スペースニードル」、生鮮市場の「パイク・プレイス・マーケット」、シアトル発祥の地「パイオニア・スクエア」などを観光し、案内役の英語講師からその歴史について説明を受けた。その後自由時間がとられ食事やショッピングをした。首尾よくまたは苦労しながら英語を使う良い機会であった。

3) 宿題とホストファミリーの協力

教材ファイルに指示された課題についてホストファミリーに質問し、回答を翌日授業で報告する。この方法の利点は、同じ話題について反復して学べることにある。つまりホストファミリーとの話し合い、自室に戻ってまとめること、翌日授業で発表することである。加えて、授業ではクラスメートの発表を聞く機会があることも功を奏してか、一週間経つ頃には、発話量が増えていった。

授業でのエピソードを紹介する。ある学生が前日の宿題についてホストファミリーとの話し合いを発表したときのことである。“My host mother takes vitamins every night. Last night, she gave me one tablet, but I didn't take it. Because our nutrition professors say

food supplements are not always good for the health, so we should try to have a balanced diet. Nutrients from natural foods." という内容の話に、講師は感動した面持ちであった。言葉の学びにおいて大学で学んだ知識が生きた例である。

4) 外部講師を招いての小講義、体験談、パネルディスカッション

午後の研修として、スタディーセンターに人を招いて話を聴き、その後質疑応答をする。難しい内容のときは通訳が同席した。家族・結婚問題のカウンセラーの話、米国で働く日本人の体験談・討論など身近で興味の惹かれる話題が多かった。学生は自分の言葉で、または通訳を通してよく質問した。

癌体験者3名によるパネルディスカッションは、乳癌を克服してワシントン大学の医療センターで患者の話し相手をしている女性、癌の治癒後次々と転移が見つかるという不安を抱えている女性、乳癌体験者の女性医師によるものであった。医師は乳癌になるメカニズムについて図を示しながら、簡潔な英語のなかに癌に関する専門用語⁷⁾を使って解説した。癌体験者の率直な話は、生きる姿勢とともに、学生達の心を深く動かしたようであった。

2. 学生の専攻分野に関連した研修（通訳付）

1) 大学での講義⁸⁾とキャンパス内の施設見学

専門関連の研修に関しては看護学科と栄養学科は別々の大学を訪問し、短期大学へは共に訪問し到着後学科別に行動した。

看護学科

Seattle University College of Nursing

講義：アメリカにおける看護事情について

(講師：米国人准教授 Ph.D., RN)

- ・老人の増加に伴う保健医療の事情
- ・看護教育制度、看護師の役割、生涯教育とその展望
- ・医療チームにおいて、医師と同等の立場で働ける制度と教育のレベルアップ
- ・インターネットによる国家試験（州単位別）制度

日本との類似点、異なる点等参考になった。看護師の役割の中で、人権尊重ケア、個人の宗教を大

事に係わる点はすぐれていた。

看護実習室見学：

メインキャンパスにて講義の後、Medical Center 内にある Lab (Laboratory: 実習、演習室) の見学をした。Medical Center ビルの5階に広大な看護実習室が設置されていた。病室と同様にすべての機械器具が備えつけられ、ベッド数、模型人形は学生数に相当して設置され、すべてコンピュータ操作が可動できる。生きている人間同様の操作をする、脈拍、呼吸、心拍数等は正常、異常の表示が可能になっている。特定の疾患をもつ人の症状も明示される仕組みになっている。

利用時間 9:00 a.m. 22:00 p.m.

- ・学生が有意義に学生相互または個人で学習できる環境である（教員からモニターを通して指導も受けられる）
- ・指導教員は常在している。学生は自由に出入りし、主体的学習が可能である。面談室、休憩室もある。

South Seattle Community College

(二年制短期大学)

講義：看護科講義室にて PowerPoint を用いて下記の説明を受けた。

- ・アメリカにおける看護師養成の教育課程
- ・看護師の資格制度（生涯養成）
- ・正看護師と准看護師の仕事の区別（准看護師は精神科で働くことはできない。）

看護実習室見学：

講義室に隣接している。学生が自主的学習のために、模型人形およびその他看護のために必要な備品が合理的に整備されている。患者の異常状態をアセスメントできる練習モデルは学習のため効果的である。

栄養学科

University of Washington Medical Center

(医療センター)

講義：Clinical Dietitian のスキルと役割

(講師：日本人管理栄養士 MS, RD, CD)

ワシントン州における 栄養士に必要な教育 栄養士の仕事についての講義。

- ・米国における臨床栄養の進歩
- ・Registered Dietitian (RD) と Dietetic Technician Registered (DTR)

- ・ Position Description - 資格・適性・必要とされる能力
- ・ Clinical Dietitian の基本的業務：
 - 患者の栄養管理 75 85%
 - 教育、教育プログラム開発 15 25%
- ・ Clinical Dietitian の日常業務：
 - 栄養アセスメント（入院時）
 - フォローアップ（3 5日ごと）
- ・ その他（経腸栄養法のガイドラインとサンプル、栄養指導マテリアルとサプリメント、カルテ記録例、チーム回診、Clinical Nutrition Services ミーティングなど）
- ・ 米国における Registered Dietitian 活躍の場
施設見学：
 - 講義の前に入院患者のための食事を用意する厨房に入り、講師の日本人管理栄養士の通訳により説明を聞いた。
 - ・ 従事者の服装は普段着とスニーカー（白衣・キャップ・マスクは着用しない）
 - ・ 食事提供におけるサービス：食事の保存法と温度管理の徹底
 - ・ 1年後食事はホテルに外注の予定。医療管理部門が注文食の内容を管理・助言

South Seattle Community College

（二年制短期大学）

講義：How Healthy is the Typical American Diet?（講師：米国人教授）

米国の食生活の問題について。米国の伝統的な食事が商業ベースの影響で、大型マック、大型コークによって米国人の胃袋が巨大となり、成人の肥満の原因となっている。貧困層や若者の食事は飽和脂肪酸が多く病気の原因となりやすい。改善のために小学校に栄養教育を導入している。沖縄の長寿と伝統的日本人食の良さに言及。

施設見学：

調理実習室、食材の貯蔵室、付属レストラン2種（一般向けと高級嗜好向け）を見学する。実習室は調理部門と菓子部門からなる。冬学期の終了時期のため実習は見学できなかったが、一部の学生が実習として付属レストランで給仕の経験も積んでいた。Community College では即職業に直結する教育をする。

2) その他の施設見学

Lynwood High School（リンウッド高校訪問）

- 2 学科合同で高校を訪問し以下の見学をした。
- ・ ランチサービス（給食システム）について見学した。
- ・ 保健室にて、養護教諭による生徒の健康管理の実際について説明を受けた。
- ・ 高校生の案内により校内見学と説明を受け、学生との良い交流ができた。

Aegis of Kirkland（老人施設）

Retirement, Assisted Living, and Alzheimer's Care

講義：担当看護師によるアルツハイマー病と認知症をもつ人のケアについて、大変詳しく、要点について説明された。看護師の役割として、人間尊厳の具体的なケアについて学生にとって刺激的な良い学びとなった。

施設見学：

- ・ Medical Center との密接な連携をもっている。
- ・ 正看護師が常勤している。
- ・ 家庭の生活環境が保持されている。
- ・ 高齢者が自律して生活しやすい工夫がされている。

3. 研修の評価

1) GPI による評価⁹⁾

最終日、英語講師による個人面接があり、一人一人に丁寧な語学の評価がなされ、記録として本学に提出された。

各ホストファミリーによる滞在中の学生の生活態度について評価が提出された。

各参加学生による GPI 研修プログラムについての評価が提出された。

2) 国際交流委員会による評価

課題のレポート提出

帰国後、参加学生は項目別にわたる課題のレポートを委員の同行教員に提出した。与えられた課題¹⁰⁾に従って各自学んだことについて文章化し、同行教員によって評価が与えられた。（全員のレポートは一つのファイルにまとめられ、学生が海外研修から得た学びについて全教員が共有できるように、看護学科、栄養学科、教養教育科に回覧された。）

アンケート調査

研修における学修に焦点をおいたアンケート調査が実施され、評価には全体的に高い数値が示

された（次節「参加学生の研修プログラムへの反応」参照）。

3) ISA によるアンケート調査

研修プログラムについて ISA によるアンケート調査が実施され、国際交流委員会に調査結果が提出された¹¹⁾。前述の「海外研修の概要

1. 研修の目的」において述べた4つの目的にそった調査項目により、目的がかなりの程度達成されたことが示されている。

4. さよならパーティ

1) 研修プログラム最終日前夜に、参加学生が主体となって計画・準備した感謝の意を込めたパーティが、全ホストファミリーメンバーと英語講師など関係者100余名を対象に開催された。日本食メニューとステージ発表プログラムにより盛会で大好評であった。

2) 語学研修全課程修了証書¹²⁾

パーティの最後に英語講師から各学生ひとりづつステージ上で修了証書が手渡され、感謝と感激のうちに全研修プログラムを修了した。

参加学生の研修プログラムへの反応

研修プログラムの評価として、ISA の調査とは別の視点で、国際交流委員会においても帰国後アンケート調査を実施した。委員会の調査は、海外研修の単位化へ向けて資料提供する意図があったため、「学修」に焦点を絞った調査項目から成る。

研修参加者は17名で、内訳は看護学科2年生9名、栄養学科2年生6名、3年生2名である。アンケート回答者は12名で回答率は70.6%、内訳は看護学科7名、栄養学科5名であった。本報告では学科別にせず12名の回答結果¹³⁾をもとに参加

者の反応を概観する。

はじめにアンケート調査の概要について述べる。調査項目は、現地で2週間行動を共にした視察者が研修の諸活動に対する参加学生の反応を探ることを意図して、作成された。回答方法は、各調査項目について4つの評価基準「 思う」「 どちらかといえば思う」「 どちらかといえばそうは思わない」「 そうは思わない」から一つ選択する。結果を概観するときにとを合わせたものが肯定的な反応、とを合わせたものが否定的な反応と判断する。調査紙には学科名を明記するが、参加学生名は無記名とする。またこのアンケート結果の使用目的を明示する。

下の表は、調査項目と調査目的についてまとめたものである。

アンケート結果の考察の進め方については、はじめにセクション毎に項目全体の平均のなかでとを合わせたものを肯定的な反応、同じくとを合わせたものを否定的な反応とし、次に個別の項目について数値の突出して高いもの、低いものについて考察する。なお、「英語研修について」はサブセクション A, B, C, D に分かれるので、サブセクション毎にセクションと同様の手順で考察をする。

英語研修について (A~D)

サブセクション A の「午前の授業」について項目全体 (1~10) の平均 41.2%と 40.3%を合わせると肯定的な反応が81.5%である。サブセクション B の「テキスト (教材ファイル)」については、項目全体 (11~13) の平均 16.7%と 36.1%を合わせると肯定的な反応が52.8%、否定的な反応が47.3%であった。他の項目と比べると否定的な反応が高いのは、教材の構成が日本のそれとは大きく異なっていることに馴染まなかったのか、

セクション ~ と調査項目	調査目的
英語研修について サブセクション A ~ D (1~20)	英語の授業における多様な教室内活動について問う。
看護学科・栄養学科の専門関連の研修について (21~23)	大学の授業との関連や動機づけについて問う。
英語研修と専門関連の研修以外の研修について (24~26)	多様な経験をする機会について問う。 また通訳の有無に対する反応をみる。
シアトル研修に備えた事前の英語学習について (27~32)	ISA 旅行ガイドブックの活用や、その他の準備対策について問う。

すべて英語による記述のため抵抗感があったのかもしれない。項目12の「英語のレベル」と項目13の「英語の量」については、ともに 33.3%と25.0%を合わせると否定的反応が58.3%であった。前者は英語のレベルが易しいとは言えない、後者は英語の量が少ないとは言えないとの反応が見られた。サブセクションCの「午後の授業」はAの「午前の授業」と似たような傾向を示した。サブセクションDの「ホストファミリーへの宿題インタビュー」については、項目全体(16~19)の平均 66.7%と 27.1%を合わせると肯定的反応が93.8%である。特に「」が66.7%と突出していることから見ても、英語研修のなかでは最も評価が高かった。

サブセクションA(1~10)について全体的に肯定的反応が高いたが、否定的反応の顕著なものは項目1と項目3であった。項目1「英文が組み立てやすくなった」の 25.0%と 25.0%を合わせると否定的反応が50.0%であった。また項目3「発音がよくなった」の 8.3%と 33.3%を合わせると否定的反応が41.6%であった。考察すると、3週間という短期語学研修では、実感できるほど変化が感じられなかったということだろう。項目1については、後述する「」・今後へ向けて」の「3.大学の英語の授業と語学研修について」において取り上げる。項目3については、視察の期間中英語講師が学生の発音を矯正したことは一度もなく、勇気をもって発話することを最優先する方針のせいだろうと思われる。

サブセクションD(16~20)のなかで、項目17と項目19は注目に値する。項目17「生活習慣や考え方が理解できるようになった。」は、75.0%と 25.0%を合わせると肯定的反応が100%である。これは研修の目的ひいては大学の教育目標を体験を通して学んだものと言える。項目19「答えるとき、相手に理解してもらえらるまで繰り返した。」も、66.7%と 33.3%を合わせると肯定的反応が100%となった。これには諦めずに粘り強く努力した姿勢が見て取れる。項目20「言いたいことを十分に表現できないことがあった」は、50.0%と 8.3%を合わせると、肯定的反応が58.3%であった。これはサブセクションAの1「英文が組み立てやすくなった」の肯定的反応50.0%という低さにも関係する問題だと思われるが、研修を通して英語習得に意欲が高まれば、今後への努力

目標になるだろう。

語学研修についてまとめると、サブセクションAの項目9「授業にはさまざまな工夫があり、英語が楽しく学べた。」の 66.7%と 33.3%を合わせると肯定的反応が100%であるように、サブセクションDのホストファミリーへの宿題インタビューも含めて、総じて高く評価されたといえる。

・専門関連の研修について

セクション の項目全体(21~23)の平均 58.3%と 27.8%を合わせると肯定的反応は86.1%である。特に項目21「専門関連の研修は、大学での専門科目の学習において参考になると思った」の 75.0%と 25.0%を合わせると肯定的反応が100%であった。海外研修以降の専門分野の学びに動機づけになったことが伺われる。項目22と項目23の「専門関連の研修と英語学習との関係」については、項目22「専門関連の研修は、英語に対する今後の取り組みに動機づけとなった」の 50.0%と 25.0%を合わせると肯定的反応が75%、項目23「研修参加前に、大学の英語科目において専門関連の英語を学んでおくほうがよいと思った」の 50.0%と 33.3%を合わせると肯定的反応が83.3%と高い数値を示した。専門関連の研修が、明確な目的をもって英語を学ぶことへの動機づけになったものと解釈できる¹⁴⁾。

・英語研修、専門研修以外の研修について

セクション の項目全体(24~26)の平均 47.2%と 19.4%を合わせると肯定的反応は66.6%である。この研修に対する評価は、参加者の英語力によって反応が別れたようである。項目24の「ショッピング」、項目25の「家庭問題のカウンセラーの話」では通訳がつかなかったため、通訳なしの状況について問うた。項目24は肯定的反応が75.0%で、3/4の学生はショッピングができたようだ。項目25について 33.3%と 33.3%を合わせると否定的反応が66.6%と比較的高い数値を示しているのは、英語力が十分ではない学生には通訳が必要であると言える。前述の「」・海外研修の内容」の「1.語学研修」の4)でも触れたように、項目26「癌体験者のパネルディスカッション」は 83.3%と 8.3%を合わせると肯定的反応が91.6%という高い数値を示し、学生の学びにとっ

て意義深いものであったことが示された。

．研修に備えた事前の英語学習について

セクション の項目全体（27～32）の平均9.7%と 59.7%を合わせると否定的反応が69.4%となり、参加者の2/3強が十分に準備をしないで参加したようである。項目29「ISAのガイドブックで勉強」の25.0%と33.3%を合わせると肯定的反応が58.3%を示し、項目31「本・参考書を買って勉強」の41.7%と25.0%を合わせると肯定的反応が66.7%であった。このことから、事前に準備した学生は、ISAが配布した旅行ガイドブックや自分で用意した本・参考書で準備したものと思われる。

以上参加学生の研修に対する反応を探った結果を概観した。総じて提供された研修への評価はよいと判断できる。他方、自由回答¹⁵⁾には研修旅行の質の改善に資するコメントがあり、委員会の今後の検討課題である。肯定的反応、否定的反応を寄せた学生双方にとって、この研修が今後の学びへ指針を与える機会となることを願う。

．今後へ向けて

1．単位化について

1) 正課としての授業と語学研修における単位認定の取り扱い

海外研修を新設科目として位置づけるなら、研修の内容に対する評価基準を設定しそれに基づいて評価できる。しかし既存科目との単位振替の場合は、学びの質や学ぶ環境が異なることから、同じ評価を厳密に適用するのは困難であると言える。たとえば英語科目として認定する場合、大学の授業はEFL(=English as a Foreign Language: 外国語としての英語教育)、海外研修はESL(=English as a Second Language: 第二言語としての英語教育)の違いがある。このような場合、「認定」による単位化もある。研修プログラム作成時に、語学研修の目的、授業内容、評価観点と評価基準について大学での検討と研修先との取り決めが必要となるだろう。

2) 海外研修の検証および評価についての先行研究

大学設置基準の大綱化(1991)以降、外国語教

育(特に英語教育)の改善要請を受けて外国語母語話者の専任採用と海外短期研修が盛んになった。その結果、短期海外研修に関する論文が数多く書かれた。研究テーマは多岐にわたるが、天使大学の研修に関連のある研究を挙げると、英語力伸長の測定¹⁶⁾、短期海外研修による意識・態度の変化の検証方法¹⁷⁾、専門を媒介とした行動と言語の相乗作用の検証¹⁸⁾がある。本学の現在の海外研修の検証にはこのとが参考になる。

上記の論文において石野他¹⁹⁾は「短期間に生じる変化を的確に捉えることは容易ではない。テストが研修で学んだことすべてを検知するとは限らない。研修がもたらす変化を捉えられる尺度を作成すべきである」と提案している。この論文では、英語力の変化ではなく、意識と態度の変化について検証方法を開発し、学生の反応を調査した結果が紹介されている。

同じくこの論文は、専門を通じた異文化体験の意義を具体例を通して紹介し、「ホストファミリーに溶け込み、農業に対する視野を広め、渡米前にあった英語への抵抗感までも取り払ってしまうほど素晴らしい異文化体験ができたのはなぜだろうか。それは短期留学プログラムの目的と学生の意欲とが好条件のもとでうまく適合でき、最大の成果が得られたからだろう。」と述べている。田崎²⁰⁾は「学生の最も興味がある学問を媒介にして異文化接触をする機会を与えれば、各自の興味と自信を伴った異文化接触が可能になることが、学生の報告から明らかになった。知識を広めたいという彼らの好奇心がアメリカ人との交流、そして語学学習をも成功させたと言えるのではないだろうか。」と結んでいる。これは本学の研修の目指すことに重なる。

上記の論文はそれぞれのテーマのもと研究した結果であり、成績評価や単位認定の方法については触れていない。しかし、短期海外研修をどのように捉えるかという点で示唆に富んでいる。

2．現地受入教育団体を利用することについて

1) プログラムの変更や微調整の必要性

プログラムを作成する段階で、毎年同じ条件とはならず、調整が必要になることがある。スタディーセンターとして地域の教会を利用することが多いが、教会で地域の行事が予定されるとそれが優先される。参加学生数によっても場所の変更があり

得る。訪問先の大学や施設についても同様のことが言える。またホストファミリーに予期せぬ出来事が生じたときも変更がある。現地入り後、乗物の手配など変更が必要になることもある。添乗員が通訳をすることになっているが、研修プログラムに熟知している教員が同行するなら、より適切に対処できるだろう。

2) ボランティアの協力と支援

地域のボランティアの協力と支援によって研修が進められるので、手作りの良さが随所に見られる。GPI 地域ボランティアが選んだホストファミリーとの生活は参加学生が最も高く評価するものである。家族として受け入れられ温かな人間関係を経験したことがよい思い出となるようである。

3) ホームステイがもたらすもの

一家庭に学生一人という環境は、日本人の友人から離れ勇気をもって新しい経験をする機会であるから、今後とも継続したい条件である。帰国後提出された課題のレポートに共通して報告されることは、ホストファミリーの日常生活から自分の家庭生活のあり方についての振り返りである。米国では、家族が言葉を大切にすること（挨拶、感謝、気遣い）、家族が共に行動すること（全員揃った夕食、週末共に行動）、個々人の主体性を尊重すること（考えや意見の交換、自主性と責任感の重視）などへの気づきである。課題のレポートには自分の日々の生活を振り返り、今後の生活を自律したものにする決意が見られる。ホームステイは語学研修とともに人間的成長にとっても多くのことを学ぶ機会となっている。

3. 大学の英語の授業と語学研修について

語学研修に関しては前提として「英語の基礎力」が必要である。文の組み立てができなければ自分の考えを伝えにくい。基本的な英文とそれを使って述べる自分の考えなり知識なりも必要である。大学での授業は座学中心になりがちであるが、英語力向上と発展のもとになる基礎を学ぶ場である。自分なりの目標をもって積極的に学ぶことが、研修の機会をより実りあるものにするだろう。

言葉を学ぶ目的は言葉を使うこと、つまり「運用力」を身につけることにある。2006年度の海外研修を視察した経験から、研修先において必要な運用力を身につける方法を一つ提案したい。書くことである²¹⁾。英語を話すことも書くことも、

考えを言葉で表すことは共通している。英語を話すとき、挨拶・依頼・感謝・交渉など場面に固有の表現または決まり文句に加えて、その場の話題に対して自分の考えなり、意見を述べる場合がある。日本の文化や習慣について説明が必要なときもある。日常生活において英語の日記、日誌、電子メール、トピックを決めて短いエッセーを書くことがその準備になる。書いたものは音読する。このライティング作業はまとまりのある内容を述べるための基礎訓練となり得るものである。そのような授業を積極的に受講したり、自己学習として授業外に取り組んでみるとよい。添削を受ける機会があれば自己表現が一段と向上するだろう。準備をすることにより他国の人々との相互理解を深め、研修をより実りあるものにしたいためである。

. おわりに

天使大学の海外研修は商業ベースに終わらず、手作りの良さに溢れている。それは多くの人々の善意と協力の賜物である。地元 GPI に所属しボランティアをする人々の協力と支援に負うところが大きい。帰国後提出された学生の課題レポートには、ボランティアをはじめ出会った人々との交流のなかで、また米国での医療・看護・栄養事情に触れることにより、この研修が語学研修に加えて、天使大学の教育目標「全人的人間観を養う」「国際的な視野を養う」などの一助になることは明らかである。本稿が、この研修の意義を伝え、天使大学の学修として更なる改善と発展を願う。

謝 辞

海外研修に豊かなご経験を有す沢禮子教授のご指導とご尽力により研修目的の明確なプログラムができたことに対して、2000年度から委員会活動に係わった多くの委員と担当職員の皆様に対して、この場をお借りして謝意を表します。またアンケート調査に協力を惜しまず、その結果を本報告に載せることに賛同してくださった研修参加学生の皆様にも謝意を表します。

注 釈

- 1) 天使大学 看護栄養学部 履修要綱・授業計画 (2006) p. - 1
- 2) 資料3参照.
- 3) TESL (Teaching English as a Second Language) 第二言語としての英語教育.
- 4) 2008年度から最少催行人員を15名とし、仮申込みまたは本申込みにおいてこれに満たない場合は中止. 同年度から参加学年の対象枠を広げる .
- 5) 資料1参照.
- 6) 著作権のため開示せず、国際交流委員会にて保管.
- 7) Cancer(癌)について metastasis(転移) benign tumor (良性腫瘍) malignant tumor (悪性腫瘍) chemotherapy (化学療法) など.
- 8) 講義のハンドアウトは国際交流委員会または沢委員が保管.
- 9) GPI による評価は個人情報が含まれるため非公開.
- 10) 資料2参照 . 書式見本.
- 11) ISA によるアンケート結果はカラーグラフの多用、24ページに及ぶため国際交流委員会にて保管.
- 12) 資料4参照 . 様式見本.
- 13) 資料5 - 1 の表参照.
- 14) 内藤他 (2007) p.22, 94.
- 15) 資料5 - 2, 5 - 3 の自由回答参照. (回答6/7) は回答者7人中6人を表す.
- 16) 千葉 (2006) p.39-40.
- 17) 石野他 (1999) pp.37-42.
- 18) 田崎 (1996) pp.21-23.
- 19) 石野他 (1999) 前掲 p.37.
- 20) 田崎 (1996) 前掲 p.23 .
- 21) 浦島他 (1995) , 自己表現の具体例として紹介 .

引用・参考文献

1. Blanche, P. : What Should be Known in Japan about Short-Term English Study Abroad, The Language Teacher, 26:12, JALT, 2002.
2. Bodycott, P. & Crew, V. : Living the Language: The value of short-term overseas English language immersion programs, The Language Teacher, 24: 9, JALT, 2000.
3. 千葉克裕 : 短期留学の語学力への長期的効果および学習意識への影響 : TOEIC スコアとアンケー

ト調査の結果から, 第45回 (2006年度) JACET (大学英語教育学会) 全国大会, 2006.

4. Furmanovsky, M. : Japanese students' reflections on a short-term language program, The Language Teacher, 29: 12, JALT, 2005.
5. Hinkelman, D. : Short-term Overseas Tours to Research Social Issues and their Effects upon Foreign Language Acquisition. (社会問題の調査を目的とする短期海外研修とその外国語獲得に及ぼす影響について) 北海道教育大学紀要第一部 C, 第44巻第1号, 1993.
6. 石野はるみ 他 : 短期海外研修のもたらすもの, The Language Teacher, 23: 6, 37-42, JALT, 1999.
7. 内藤 永 他 : 北海道の産業界における英語のニーズ, 大学英語教育学会 ESP 北海道, 2007.
8. 田崎敦子 : 大学生に対する夏期短期留学プログラムの成果と課題 - 専門を媒介とした行動と言語の相乗作用 -, The Language Teacher, 20: 7, JALT, 1996.
9. 浦島 久, クライド・ダブンプート : 自分を語る英会話, ジャパン タイムズ, 1995 .

資 料

1. 第6回 (2006年度) 天使大学海外研修プログラム「アメリカ看護栄養事情視察と英語研修」
2. レポート (書式見本)
3. GPI の組織図
4. GPI の修了証書 (様式見本)
5. アンケート調査結果 : 5 - 1 の表 (%表示) , 5 - 2 看護学科自由回答 5 - 3 栄養学科自由回答

【天使大学 シアトル研修プログラム 日程】 (予定)

資料 1

日次	日付	都市名	交通	時間	スケジュール	食事		
						朝	昼	夕
1	3/12 (月)	新千歳空港 新千歳空港発 成田空港着 成田空港発	JL3042 JL012	12:30 13:55 15:40 17:10	新千歳空港へ集合 国内線にて成田へ 出国手続き後、空路バンクーバーへ (機内泊)			機
		バンクーバー着 バンクーバー発 シアトル近郊	バス	09:40	到着後入国審査を受けます 専用車にてスタディーセンターへ 途中、国境を越えアメリカへ入国 途中、昼食ストップ 到着後、現地スタッフと簡単なオリエンテーション ホストファミリーと対面 (ホームステイ)	機	各自	家
2	3/13 (火)	シアトル 近郊		午前 午後	英語クラス オリエンテーション 地域散策とフットラリー (ホームステイ)	家	各自	家
3	3/14 (水)	シアトル 近郊		午前 午後	英語クラス 会話を発展させる/人の特徴について 言語ゲーム (ホームステイ)	家	各自	家
4	3/15 (木)	シアトル 近郊		午前 午後	英語クラス 性格/良いマナー 大学訪問でのレクチャー <u>看護科:シアトル大学</u> 【ご年配患者のケア/アメリカ社会における LPN&RNの役割・責任/アメリカ社会における看護 師として必要な教育とは】 <u>栄養科:ワシントン大学医療センター</u> 【日本人栄養士によるレクチャー/栄養士として必要な 教育、栄養士として仕事】 (ホームステイ)	家	各自	家
5	3/16 (金)	シアトル 近郊		午前 午後	英語クラス 食物/栄養/運動 南シアトルコミュニティカレッジ訪問 レクチャーとキャンパスツアー (ホームステイ)	家	各自	家
6	3/17 (土)	シアトル 近郊		終日	ホストファミリーとお過ごしください (ホームステイ)	家	家	家
7	3/18 (日)	シアトル 近郊		終日	ホストファミリーとお過ごしください (ホームステイ)	家	家	家
8	3/19 (月)	シアトル 近郊		午前 午後	英語クラス 日米/学校の違い 英語クラス 日米/若者の成長の差 (ホームステイ)	家	各自	家
9	3/20 (火)	シアトル 近郊	公共交通	終日	終日シアトル市内見学研修 ウェストレイク、パシフィックプレイス、パイクプレイスフィッシュマーケット、 スペースノードル 終了後、公共交通機関にてスタディーセンターへ (ホームステイ)	家	各自	家

日次	日付	都市名	交通	時間	スケジュール	食事		
10	3/21 (水)	シトル 近郊		午前 午後	英語クラス 家族、結婚、男女交際 家族/結婚問題のカウンセラーからの話しを聞く (ホームステイ)	家	各自	家
11	3/22 (木)	シトル 近郊		午前 午後	英語クラス 職業とボランティアについて アメリカで働く日本人を招いての講義・討論 (ホームステイ)	家	各自	家
12	3/23 (金)	シトル 近郊		午前 午後	リンウッド高校訪問 看護科：学生の健康管理についてのディスカッション と施設見学 栄養科：栄養価基準についてのディスカッションと小 学生のための給食調理場見学 パネルディスカッション(癌体験者) 【適切な食事と早期診断による癌予防】 (ホームステイ)	家	各自	家
13	3/24 (土)	シトル 近郊		終日	ホストファミリーとお過ごしください (ホームステイ)	家	家	家
14	3/25 (日)	シトル 近郊		終日	ホストファミリーとお過ごしください (ホームステイ)	家	家	家
15	3/26 (月)	シトル 近郊		午前 午後 夕刻	英語クラス アメリカの高齢者の健康・医療管理 ホストファミリーへお礼状作成とパーティー準備 さよならパーティー (ホームステイ)	家	各自	家
16	3/27 (火)	シトル 近郊	公共機関	午前 午後	英語クラス 休日とお祝い事 公共交通利用にてエイジスナーシングホーム訪問 高齢者のケア、痴呆とアルツハイマー患者の特徴、栄 養のガイドラインについてのレクチャーと施設見学 (ホームステイ)	家	各自	家
17	3/28 (水)	シトル 近郊		午前 午後	英語クラス まとめ(クラスの感想、評価など) 掃除 アルダーウッドモールでショッピングタイム (ホームステイ)	家	各自	家
18	3/29 (木)	シトル発	バス	08:00 12:00 -13:30 -17:00 バス 19:30	ホストファミリーと別れてバスにてバンクーバーへ グランビルアイランドにてランチタイム スタンレーパーク、ガスタウン散策とロブソンストリートでのショッピングタイム ホテルチェックイン後、ローカルレストランで夕食 ホテル帰着 (ホテル泊)	家	各自	レスト ラン
19	3/30 (金)	バンクーバー発	バス JL017	12:45	チェックアウト後、バスにてバンクーバー空港へ 出国審査を済ませ、空路成田へ (機内泊)	各自	機内	-
20	3/31 (土)	成田着 成田発 羽田着 羽田発 新千歳着	バス JL1041	14:30 15:30 17:00 20:30 22:00	到着後、入国審査 成田より、リムジンバスにて羽田へ 国内線にて新千歳へ 到着後、解散	-	機内	各自

資料 2

＜海外研修プログラム＞

【研修期間】

2004年3月14日(月)～3月31日(木)

【研修地】

アメリカ ワシントン州・シアトル近郊

【目的】

今回の海外研修は、アメリカ(シアトル近郊)の家庭にホームステイをし、家族のメンバーとして入ることによって、その場での生活体験を通して様々な人間関係の中で相互理解を深め、生活体験も豊富になり異文化を直接肌で感じることににより、日本文化の再認識・他国語の学習意欲を養う。

アメリカの保健医療・栄養管理(食生活指導等)の現状、また教育について、講義や施設訪問を通して認識を広める。
国際的視野をもった専門職業人としての人間成長に貢献する。

【目標】

- 1. 主体性を育てる
自分の家庭を離れてアメリカでホームステイをすることにより、自分の行動を規制できる主体性を育てる。

II. 異文化学習

アメリカの家庭に入り、その生活を通してアメリカの風俗習慣・伝統・文化・歴史に触れ、日本文化の再認識をする。

III. 語学の体験学習

生きた英語・英会話の力を向上させ、英語習得への意欲を高める。

IV. アメリカの看護・食生活指導(管理)について知る

アメリカでの保健医療・福祉・給食管理システムの現状を学び、看護栄養学部の学生としての学習に役立たせる。

【評価】

I. 主体性を育てる

- 1) 主体性を育てたと思わせるケースを具体的に書き出す
- 2) 各ケースでどのような対応したかを書く

II. 異文化学習

- 1) 何に興味を持ったか、アメリカの文化で何を学んだのかについて書く
- 2) それについて自分はどう感じたのかを書く
- 3) 日本文化について再確認できたと思う点、国外から見た日本文化について感じたことを書く

III. 語学の体験学習

- 1) 語学学習で良かった点について書く
- 2) 今後語学の勉強についてどうしたいかを書く
- 3) 指導方法また学習方法で良かった点、もう少し工夫がされたらもっと良かったと思われる点、また事前学習のあり方について書く
- 4) 自己の語学の向上に役立った点

IV. アメリカの看護・食生活指導(管理)について知る

- 1) 看護教育、看護前の役割、アルツハイマーのケア等
- 2) 管理栄養士の養成、栄養サポートチームと役割など
- 3) もっと知りたかった点
- 4) 講義についてわかりにくかった点、今後の希望など
- 5) 施設訪問で学んだ点の列挙

V. 事前オリエンテーションや現地でのオリエンテーション等についてはどうでしたか?

VI. その他、全体を通して感じたこと、今後の海外研修プログラムの参考になること等があれば書いて下さい

注：評価項目別にレポート(上原紙2枚以上)をまとめ、4月8日【金】までに6月号2ページの(6-2-11) レポートボックスに提出する。

国際交流委員会 沢 禮子



March 27, 2006

Estimation of Hours – Tenshi University

1. English Class conversation and reading 3 hrs/day X 10 = 30 hours
2. Action English (Activities) 3 hrs/day X 3 = 9 hours
3. Home work (talk with host family and report to class the next morning) 1 hr or more X 9 = 9hrs (or more)
4. Four days (weekend) w/ Host family 4 hrs X 4= 16hrs.
5. Study (lectures and discussing) 15 hours
 - a. Seattle University
 - b. University of Washington
 - c. Primary school or High school
 - d. CRISTA
 - e. Panel of Breast Cancer Survivors

Sr. Reiko Sawa
Professor
Tenshi College

Robin McCrane
Robin McCrane
Regional Manager
Global Partners Institute

Darlene Aaby
Darlene Aaby
Program Coordinator
Global Partners Institute

One World ~ One Family

1605 Boylston Avenue, Suite 303, Seattle, WA, 98122 Phone: (206) 748 0232 Fax: (206) 748 0395
www.gpicanada.com

現地受入教育団体について

GPI

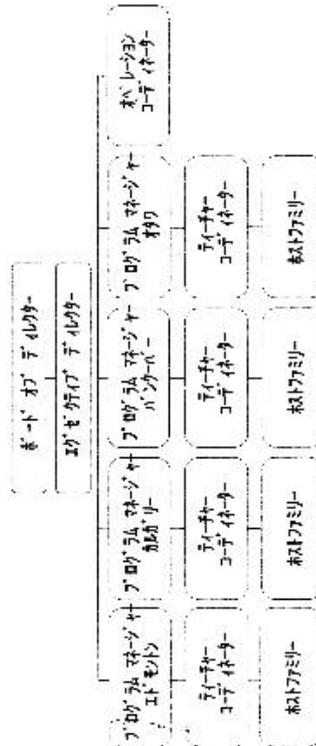
- 名称：Global Partners Institute
- 設立：1992年
- 所在地：Abbottsford, B.C. Canada/Seattle, WA USA
- 代表者：Akihiro Morimoto (7年D・E/F)
- I S A 団体顧客年間取扱実績：約900名

概要

GPIは非営利の教育交流の組織で、学生により良い留学研修とより良いホームステイ体験を提供する組織として発足しました。GPIのプログラムの特徴としては次の点があげられます。

- 一つのホストファミリーにつき1人の学生を保証します。
- 修学経験豊かな教師が授業を担当します。
- 独自の語学カリキュラムを有しています。
- 親切かつ経験豊富なスタッフが迎え入れます。
- 報酬にまで神経の用いた精緻なプログラムを提供します。

組織構成



資料 5-1

第6回(2006年度)天使大学海外研修に関するアンケート調査(参加者全体)

I 英語研修について

そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう思わ ない	そう思わない
------	------------------	------------------------	--------

A 午前の授業について

(1~10の平均)

	41.2%	40.3%	11.8%	6.7%
1. 英文が組み立てやすくなった。	0.0%	50.0%	25.0%	25.0%
2. 日常生活の語彙や表現が増えた。	33.3%	50.0%	16.7%	0.0%
3. 発音がよくなった。	8.3%	50.0%	8.3%	33.3%
4. 英語を話すことに慣れた。	50.0%	41.7%	8.3%	0.0%
5. 英語を聴く力がついた。	41.7%	41.7%	16.7%	0.0%
6. 先生が話す姿勢を引き出してくれた。	66.7%	25.0%	0.0%	8.3%
7. 宿題を通して発表力がついた。	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%
8. さまざまな話題を通して英語が学べた。	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%
9. 授業にはさまざまな工夫があり、英語が楽しく学べた。	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%
10. 友達の英語を聴くことは参考になった。	63.6%	27.3%	9.1%	0.0%

B 午前の授業で使用したテキストについて

(11~13の平均)

	16.7%	36.1%	30.6%	16.7%
11. 内容が興味深かった。	16.7%	58.3%	25.0%	0.0%
12. 英語のレベルが易しかった。	16.7%	25.0%	33.3%	25.0%
13. 1回の授業にたいする量が少なかった。	16.7%	25.0%	33.3%	25.0%

C 午後のAction Englishについて

(14~15の平均)

	54.2%	33.3%	12.5%	0.0%
14. リラックスした雰囲気なので英語が話しやすかった。	58.3%	33.3%	8.3%	0.0%
15. ジェスチャーを伴うゲームは英語が理解しやすかった。	50.0%	33.3%	16.7%	0.0%

D 宿題のホストファミリーへのインタビューについて

(16~19の平均)

	66.7%	27.1%	4.2%	2.1%
16. 日常生活の語彙や表現がふえた。	58.3%	25.0%	16.7%	0.0%
17. 生活習慣や考え方が理解できるようになった。	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%
18. 質問するとき、相手に理解してもらえるまで繰り返した。	66.7%	25.0%	0.0%	8.3%
19. 答えるとき、相手に理解してもらえるまで繰り返した。	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%
20. *言いたいことを十分に表現できないことがあった。	50.0%	8.3%	33.3%	8.3%

[注]20. *は平均計算から除く

II 看護学科または栄養学科の専門関連の研修(講義・施設見学)について

(21~23の平均)

	58.3%	27.8%	13.9%	0.0%
21. 専門関連の研修は、大学での専門科目の学習において参考になると思った。	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%
22. 専門関連の研修は、英語に対する今後の取り組みに動機づけとなった。	50.0%	25.0%	25.0%	0.0%
23. 研修参加前に、大学の英語科目において専門関連の英語を学んでおくほうがよいと思った。	50.0%	33.3%	16.7%	0.0%

III 英語研修と専門関連研修以外の研修について

(24~26の平均)

	47.2%	19.4%	22.2%	11.1%
24. シアトル市内見学研修で、英語でショッピングできた。	33.3%	41.7%	25.0%	0.0%
25. 家族・結婚問題のカウンセラーの話は、通訳なしで理解できた。	25.0%	8.3%	33.3%	33.3%
26. 通訳付の癌体験者によるパネルディスカッションは、将来患者様の気持ちを理解することに役立つと思った。	83.3%	8.3%	8.3%	0.0%

IV シアトル研修に備えた事前の英語学習について

(27~32の平均)

	15.3%	15.3%	9.7%	59.7%
27. 天使大学のOE I(と/または)OE IIのテキストを復習した。	0.0%	8.3%	16.7%	75.0%
28. 天使大学の英語I(と/または)英語IIのテキストを復習した。	0.0%	0.0%	16.7%	83.3%
29. ISAのガイドブック(CD付)を勉強した。	25.0%	33.3%	8.3%	33.3%
30. テレビやラジオの英語番組を視聴した。	16.7%	16.7%	8.3%	58.3%
31. 本・参考書を買って勉強した。	41.7%	25.0%	8.3%	25.0%
32. 語学学校に通った。	8.3%	8.3%	0.0%	83.3%

[注] OEはOral English、英語はリーディング (Iは1年次必修、IIは2年次選択)

看護学科自由回答

I. 英語研修について

英語研修全体を振り返って、英語学習について印象深かったことや要望があれば、書いてください。
(回答 67)

- ・天使の先生方とスタディセンターの先生と考えを統一させてほしかった。辞書の使用についてなど。
- ・現地で働く人の話を聞けて外国での就職について知れてよかった。
- ・日本語でも話すことのないようなむずかしい単語もあったが、だからこそ相手に自分の考えを伝えようと努力することができ、英語力もついた。また、自分の考えをまとめるのがうまくなったように思う。
- ・J先生がとても楽しく明るい先生で、私のかたことの英語もちゃんと聞き入れてくれてくれた姿勢がとても嬉しかった。
- ・毎日の英語の勉強や家族の会話を通して、少し英語力が身についたのではないかと思います。
- ・レベルに合わせたクラス分けでレベルに応じた授業内容の展開にしてほしかった。
- ・文法レベルがバラバラのところにいるのは苦痛だった。
- ・語せる人同士でもっともっと「会話」したかったし「会話」を学習したかった。
- ・シアトル行く前にもっとある程度勉強するべき。
- ・政世跟 be 動詞と一般動詞の使い分け。 英語レベル低い。
- ・M先生のクラスで紙に書いて発表したことがとても勉強になった。
- ・発表する力と紙に表現する力を身につけられたらと思う。

II. 看護学科または栄養学科の専門関連の研修について

- 専門関連の研修全体を振り返って、印象深かったことや要望があれば、書いてください。(回答 17)
- ・表面的なことだけでなく、もう少し深く知りたいということがたくさんあった。

III. 英語研修と専門関連の研修以外の研修について

- 英語研修と専門関連研修以外の研修を振り返って、印象深かったことや要望があれば、書いてください。(回答 17)
- ・がん研修者のお話はとて感動がされました。実際に体験した方のお話を聞くことによって看護の視点が少し変わりました。

IV. シアトル研修に備えた事前の英語学習について

- 上記以外に、役に立った準備やお勧めの準備などがあれば、書いてください。(回答 27)
- ・単語の映画をたくさん見た。(日本語字幕あり、英語字幕など)。
- ・看護はアメリカ人の神文化に頼んで英語覚えてもらってました。Skype/トリック Day もそこでおそわりました。
- ・前もって勉強していたこと。
- ・自分の会話力(英語力)がどれほど通じどこまで通じないのか、何の学習が今後必要かみえた。

栄養学科自由回答

I. 英語研修について

英語研修全体を振り返って、英語学習について印象深かったことや要望があれば、書いてください。
(回答 46)

- ・先生に英語が上達したとほめられたこと。
- ・久しぶりにはめられて、しかもずっと先輩だった英語についてほめられたのですごくうれしかったです。
- ・日本の授業では発言しないが、会話がかわってたくさん発言する機会があった。
- ・質問をするという課題は内容も工夫もされて興味深く、アメリカの文化を知ることができる手段となった。また、より家族とうちとややすくなったと思う。
- ・途中でクラスを覚えても楽しかったと思う。2人の先生の授業のやり方が異なっていたようなので少し気になった。
- ・もっと余裕をもって(時間的な)学習をしたかった。
- ・英語力の向上はあまり感じられず、それよりも聞き取り言葉が呪文からななくて戸惑ったことの方が多かった。しかし話をうとうとする気持ちは英語があれは言葉の壁も乗り越えられると感じた。

II. 看護学科または栄養学科の専門関連の研修について

- 専門関連の研修全体を振り返って、印象深かったことや要望があれば、書いてください。(回答 46)
- ・アメリカの病院システムがすごく進んでいること。
- ・逆に前生面や後生面は日本の方がしつかりしていた。
- ・現地で働く栄養士の話をもっと聞けようと思った。
- ・まだ臨床栄養について学習しておらず、また学外学習もしていなかったため、全く知識がなく日本との比較のしよがなかった。栄養の先生がいらっしゃれば、質問もできたのでよかったことと思う。また研修の後の質問時間がなく、宿題に質問できなかったのは残念だった。
- ・また病院実習等に行っていたことがなかったことで、日本の実情が今イチつかめず、比較が難しかった。

III. 英語研修と専門関連の研修以外の研修について

- 英語研修と専門関連研修以外の研修を振り返って、印象深かったことや要望があれば、書いてください。(回答 36)
- ・日本とアメリカのちがいを学べた。
- ・お寺の人には英語が伝わらなくて苦労したが、1つ1つ全てが良い経験になった。
- ・ショップセンターよりもいろいろな場所へ行ってみたかった。買い物は土日にも行けたので1日でもよいと思。カナダでの買い物時間は少し長く感じた。観光はよかった。栄養に直接関係ないが、ガン患者の方、カウンセラーの方、政治家の方のお話を聞いたのはよかったです。
- ・細体線者の方のお話はとても感動しました。

IV. シアトル研修に備えた事前の英語学習について

- 上記以外に、役に立った準備やお勧めの準備などがあれば、書いてください。(回答 36)
- ・すみません、全く勉強してないです。
- ・英語は全くできなかったけれど、その分すごく向上したと思います。
- ・英語の音楽をたくさんきいた。
- ・英語の会話をひたすら聞くこと。行ってから耳が慣れやすかったと思う。